

第59回全国高等学校軟式野球選手権大会 視察報告

長野県岡谷工業高等学校
軟式野球部監督 今井元文

はじめに

今年度の全国大会監督研修（視察）につきましては、本県より上田西高等学校が全国大会へ出場が決まったことによりご挨拶やらで常務理事が現地へ出向くよう県連盟より指示があったこと。今井が過去一度も監督研修に出向いていないこと。今井が監督研修を兼ねることより予算の節約にもなるという観点等より視察させていただく事としました。

今後、常務理事をやられる先生方、各チームの監督、更には本県から全国大会へ出場し勝利するためには・・・双方の観点から報告をさせていただきます。

このような機会を与えていただきました関係各位に感謝申し上げます。

【8月25日（月） 開会式】

- ・常務理事の立場として

県連盟の指示より菓子折を持参し、大会本部を訪れご挨拶をした。

大会本部は開会式前ということもあり緊張感漂う異様な雰囲気であったが、日本高野連の皆様をはじめ兵庫県高野連、関係の皆様より暖かく歓迎していただいた。

今年は北信越地区代表が福井県であるため福井県副理事長が大会役員として出席されていた。来年、再来年は北信越地区代表が長野県となるため前日の代表者会議から開会式まで軟式部会の常務理事が出席（開会式時には役員としてグラウンドに整列）という事になる。

- ・監督の立場として（スタンドで観戦した様子）



ライト側外野入口外には出場16校が整然と整列する中、どのチーム、選手ともに期待と不安のせいか心持ち緊張の面持ちで開会式が始まった。

地元高等学校吹奏楽部の演奏により入場行進が始まる。グラウンドのスタイル、蒼々たる関係者の数、いわばミニ甲子園の雰囲気すら感じられた。

どのチームも元気に堂々と入場行進をする様子に自分のチームを重ね合わせてみる。いつかは必ず・・・と気持ちも高ぶった。



入場行進を待つ選手達

入場行進スタート！



本県、上田西高校入場！



堂々で行進する上田西ナイン



16校整列の様子



一連の経過で開会式が進んだ。グラウンドに立っている選手達。誰一人乱れることなく整然と厳粛に進んだ開会式。
一番関心したのは開会式終了後の退場時、どのチームも全力でグラウンド外へ走り去った姿。やってやるぞ！という気持ちがスタンドにまでひしひしと伝わってきた。
天候にも恵まれ素晴らしいの一言に尽きる開会式であった。

【8月25日(月) 第一試合 早大学院(東京) 対 文徳(南部九州・熊本) トーカロ】

文 徳	1	0	2	0	3	1	0	0	0	7
早大学院	0	2	0	0	0	0	2	0	2	6

文 徳 ヒット7 エラー3
早大学院 ヒット12 エラー1

開会式後の初戦という事もあり、両チームもかなり緊張している様子であった。
今大会を通して、最も点の取り合いとなったゲームである。(他の試合ではMAX 4点)
常務理事としての仕事もあったため最初から最後まで観戦する事ができなかったためゲーム内容の詳細を記すことができないことをお許しいただきたい。

途切れ途切れで観戦した感想を列挙したい。

★一番おどろいた事としてはとにかく外野の守りが浅い・・・

ライト、センター、レフト、ほぼ一直線と言っても過言ではない。

故にセンターゴロが成立した場面もあった。

長野県大会で見られるような外野の間を抜く打球や頭を越える打球はほぼ皆無。

投手力(バッテリー力)があるのだろうか・・・

なかなか外野への打球は出ないものだと・・・

★投手力(バッテリー力)があるにもかかわらず、積極的に盗塁が見られた。

やはりノーアウト、ワンアウト、ランナー3塁を作るためには積極策が必要であると感じた。

★送りバントの正確性

軟式にしても硬式にしても、プロ、アマ問わず必要であろう送りバント。

両チームともサインの出た時点で確実に成功させていた。

練習量の賜なのだろうか。大事な事だと痛感した。

★点の取り方

この試合はエラー絡みで失点した場面もあったが、ランナー3塁からスクイズ、たたきによってチャンスを確実に得点に結びつけていたように思う。

取れる点は確実に得点するという明確な意志が伝わってきた。

★ヒット数、エラー数からみた勝ち負けの相関

この試合は相関関係が崩れていた。ヒット数だけでみれば早大学院、エラー数でいっても文徳の方が多。しかし勝利したのは文徳。

ヒットが多く出ても、次の塁へ進塁させる事ができなかったり後続につながらなかったり早大学院は攻めきれない様子。エラー数も文徳の方が多。そのエラーをカバーできる力量が精神面、技術面ともにあったと考えられる。

THE 軟式野球に徹底する事が勝利に結びつく近道であると思えた。

★選手の言動

両チームともさすが全国大会へ出場してくるチーム。頭髪でこそ硬式とは格差はみられたが、発する言葉、ベンチワーク、攻守交代の機敏さ、どれをとっても文句のつけがたいものであった。長野県大会でも全チームがそうでありたいと感じた。

★ジャッジ

さすが全国大会の審判員。長野県がどうのではなく毅然としたジャッジで好感が持てた。

★応援団

さすが全国大会。

スタンドにはベンチに入れなかった選手を筆頭にプラスバンド、保護者、ミニ甲子園のアルプススタンドを感じられる雰囲気であった。

その応援するスタンドも規律良く指導されていて応援を見ているだけでも高校野球の雰囲気を十分味わうことができた。

【8月25日（月）第二試合 上田西（北信越・長野） 対 崇徳（西中国・広島） トーカロ】

上田西	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
崇徳	0	0	0	1	0	0	0	1	×	2

上田西 ヒット3 エラー2

崇徳 ヒット5 エラー1

この試合はスタンドにて初回から応援する事ができた。

試合内容は割愛するが、この勝負がその後の世紀の一戦につながったことは間違いのないであろう。

本県代表の上田西高校のナインはベンチ、控え選手、スタンド、一丸となってさすが全国大会へ出場したチームだと誰もが思えるゲームをしてくれたと自信を持って言える。

序盤のチャンスをものにできていれば・・・完全に上田西のペースに持ち込んでいただけに残念な結果となってしまった。

ただ、崇徳のエース番号をつけたピッチャーが8回から登板し圧巻のピッチングを披露。そこで流れが変わった雰囲気であった。



上田西応援スタンド



敗戦後の様子

【8月25日（月） 大会二日目 高砂市野球場】

- ・ 常務理事の立場として（高砂市野球場）

前日同様、県連盟の指示より菓子折を持参し、大会本部を訪れご挨拶をした。

大会本部は二日目という事もあり落ち着いた様子であった。

【8月26日（火）第一試合 仙台商業（南東北・宮城） 対 南部（近畿・和歌山） 高砂】

仙台商業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
南部	0	0	0	0	0	0	0	0	1×	1

- ・ 監督の立場として（第一試合をスタンドで観戦した様子）

まず驚かされたのは球場の広さとスコアボードであった。聞くところによれば、プロ野球選手のキャンプ地として利用されはじめたのがきっかけで、ファールゾーンの広いこと。スタンドからみた光景はとにかく四角くベンチからホームベースまでが遠い。故にワイルドピッ

チやパスボールがおこればランナーは2つ進塁できてしまうのではという感想であった。そしてスコアボード。なんと手書き・・・専属の方がいらっしゃるようで誠達筆で選手の名前が書かれたボードがかかる・・・

さて、試合の方であるが南部は和歌山ということもあり比較的近い。が、仙台からはかなりの遠方にもかかわらず吹奏楽をはじめ多くの応援団がかけついていた。両スタンドとも活気あふれる応援合戦となっていた。

そんな中試合は一点を争う投手戦。両チームともにチャンスはつくれぞ一発がでない。そしてエラーもしない。鉄壁の守備で延長戦へ突入。

延長10回裏、南部の攻撃。1アウトからレフト前シングルヒット。ここで仙台商業は満塁策をとる。果たして吉と出るか凶と出るか。結果は満塁になった直後のバッターに痛恨のワイルドピッチ。サヨナラゲームとなった。

両チームともに数回のチャンスがあったものの、両チームのエースはその都度ギアを入れ替え完璧なピッチングを披露。

どちらに勝利の女神が微笑むか。満塁策がどうだったのか・・・

自分が監督であったならばと思うと複雑な心境でゲームセットを見送った。

負けてしまったとはいえ仙台商業のナイン、スタンドは晴れ晴れとした様子で好感が持てた。



なんと広い球場か



遠く仙台から・・・



南部のスタンド

【まとめ】

- ・今年には常務理事の立場と監督の立場で研修させていただいた。とても良い経験となった。多くの監督に全国大会の雰囲気を感じてもらいたい。来年は常務理事は役員として参加。監督研修に積極的に希望をお出しいただきたい。
- ・長野県が全国大会へ出場して勝利するためには。私が出した結論は投手力(バッテリー力)の強化である。長野県大会を見ていると、攻撃面、守備面では劣っているとは思わない。やはり投手力(バッテリー力)の違いが全国との違いであると痛感した。逆を言えばそんな投手からどのように得点を奪うかも考えなくてはならないが・・・
あとは、軟式野球とはいえもっと野球を大好きになり軟式だからというような甘い考えは捨て、全ての言動に責任をもち高野連に登録された選手であるという自覚と自信が必要で有ることも付け加えたい。
- ・今後永遠と語り継がれるであろう知る人ぞ知る大会となった。マスコミはもちろん様々なところから様々な意見が聞かれる。軟式野球にも注目が集まることは間違いなさであろう。運営上の問題にも様々な考え方があるが、長野県としてどのようなスタイルになっても対応できる準備は整えなくてはならない。
- ・最後に、北信越地区からは常に長野県が代表となれるよう、常務理事としても努力するのはもちろん、各チーム監督、選手、一層の努力、飛躍を期待したい。